

十分な準備，特に教材の論理構造と生徒の心理構造をよく配慮した，「わかる授業」を準備しなければならない。

ここでいうわかる授業とは，教師側からすれば「学習の目標が生徒にわかる」，「学習の内容が生徒にわかる」，「学習の方法が生徒にわかる」ことであり，生徒側からすれば生徒の学習態度としては，「目的－手段」関係を明確にしながら，自分自身の問題として，身を入れて学習し，ひとつのやり方に失敗してもくじけないで，次々と新しいやり方を考え出し，進んで質問したり，参考書で調べたり，討議したりして，計画的・創造的に，ねばり強く進んでいくことである。

このように，わかる授業のあり方を考えないで，ただ，学習意欲がない生徒がいるといっても，それは，教師みずからが種をまいているといっても過言ではないだろう。よく準備された授業ならば，学習意欲のない生徒の数も減少するはずである。にもかかわらず，少数であるかも知れないが，一時間，一時間の授業の流れに，なかなか乗れない生徒がいることも事実である。

では，そのような生徒は，どんな生徒であるか考えてみよう。

- (1) カリキュラムが，本人の能力に適合一致していないため，高い要求についていけない（遅進・不振）生徒や，退屈している（優秀）生徒。
- (2) 能力はあるが，レディネスとしての基礎学力が身につけていない生徒。（その原因には，注意が必要であり，特に，虚弱，情緒障害を問題としなければならない。）
- (3) 教師や友人からの承認や愛情が得られなかったり，親の過保護，拒否，放任などによって，性格がゆがめられ，極度に攻撃的になってしまった生徒。また，反対に引っ込み思案になってしまい，いつもびくびくしている生徒。

いずれも，人間関係のゆがみから，適正な社会性が身につかず，いたずらに，心的エネルギーを浪費している生徒である。

(4) 神経過敏で，刺激に対して反応が強く，不安に陥り，落ち着かない生徒。根気がなく，欲求不満に対する耐性が乏しいなど，人格の統合がとれていない生徒。あるいは情緒障害の生徒。

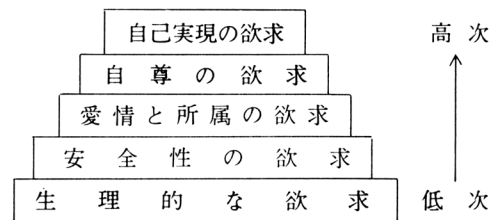
(5) 家庭環境や近隣の環境が悪く，興味や関心が学校教育以外のものに向けられている生徒。これらのことは，単独に作用する場合は少なく，普通，複雑に絡みあって，学習意欲の乏しい生徒を生み出しているのである。

4. 学習意欲を高める方策

学習意欲を問題にする場合，人間のパーソナリティの全体構造から考察を加えてみたい。

マスローは，「人間の基本的欲求は，低次な欲求から，高次な欲求へと階層をなしている。」と考え5階層に分けている。

図1 マスローの欲求階層



この欲求階層では，人間は，誕生直後においては，生命維持にかかわる生理的欲求の充足のためにだけ行動し，その他の欲求を知らない。しかし，やがてその欲求の満足のうえに，危険から身を守ろうとする安全性の欲求が働き，行動を支配するようになる。更に，この充足のうえに，愛情と所属の欲求，自尊の欲求（自分の存在・価値を尊重し，また他から尊重されたい欲求），そして，最後に，自己実現の欲求と，次々に生まれてくるとしている。

この考えを，学習の場に置きかえてみれば，次のようになるであろう。

○ 1次レベルの欲求

学習するよりも，自分のからだのために，外に出て遊ぶ方がよい。